

私の読書日記

H-18

金正日の出自、小沢本の仕分け、醜の歴史

立花隆  
ノンフィクション作家



朴正熙が政権を握っていたのは一九六一年の軍事クーデターから一九七九年に暗殺されるまでの十八年間だったが、この間に韓国経済は驚くべき躍進をとり、

×月×日  
佐藤守『金正日は日本人だった』(講談社 1700円+税)は、タイトルからしてトンデモ本としか思えない本だが、これが読んでもみるとなかなか面白い。著者は自衛隊で情報活動に従事し、空幕の広報室長も務めた人でなかなかの筆達者。なぜ金正日が日本人かという点、金正日は実は金日成の息子ではなく、金日成の同志で朝鮮戦争時、前線司令官をつとめた伝説的英雄の息子が養子になったというのだ。そしてその男、実は日本陸軍が朝鮮半島に残した残置諜者だった、という。耳を疑うような話だが、もっともらしい間接的証言証拠が山のように出てきて、話としては

きすぎといたくなるほど面白い。情報通によると、この話、インテリジェンスの世界では昔から知られた話で、複数国のれっきとした情報組織によってその真偽のほどが調査され、真ではないことが確認されているという。とはいえ、この本に書かれている部分的真実は沢山あると考えられ、メインストーリーがガセだとわかっている。ワキ筋が面白いのである。

の一人で、暗殺の対象として狙われたこともある。犯人が在日韓国人だったから日本でもよく知られている文世光事件。つまり、朴権恵は文世光事件で外れたピストルの弾にあたって死んだ朴正熙夫人、陸英修の娘なのだ。なぜ金正日はわざわざ朴権恵を招いたのかというと、あの事件を謝罪するためだった。金正日は、あの事件が北朝鮮の特殊機関によって起こされたことを認めて謝罪し、将来韓国を訪問することがあったら、真っ先に朴大統領の墓参りをしたいとまで言った。そしてかつて敵視していた朴正熙をほめたたえたという。

×月×日  
なぜ朴正熙がそれほど偉大な政治家と考えられるようになったかは、趙利済／渡辺利夫／カーター・J・エッカート編『朴正熙の時代 韓国の近代化と経済発展』(東京大学出版会 3800円+税)を読むとよくわかる。

私が注目したのは、二〇〇二年に朴正熙の娘で韓国のハンナラ党元副総裁だった朴権恵が北朝鮮に招かれた金正日と会ったという話(これは事実)。朴正熙といえば、北朝鮮からその存在が最も憎まれていた政治家

いま韓国では、朴正熙と朴正熙の政治が大きく再評



『金正日は日本人だった』

朴正熙が政権を握っていたのは一九六一年の軍事クーデターから一九七九年に暗殺されるまでの十八年間だったが、この間に韓国経済は驚くべき躍進をとり、

たちばなかし 1940年長崎県生まれ。『宇宙からの帰還』『サル学の現在』『滅びゆく国家』『ほくらの頭脳の鍛え方』(佐藤優氏との共著)ほか著書多数。

く知られている。

本書は、韓日米露の学者の共同研究で、なぜこれほどの大躍進が可能となったのかを、政治・経済・社会・科学技術・教育などあらゆる角度から分析している。

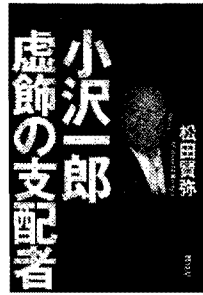
一言でいうなら、この奇跡を可能にしたものは、若くて優秀な官僚をどしどし育成抜擢して彼らに大きな権限を与え、大胆な施策を次々に展開していったエリート主義だ。絵に描いたような官僚主導型の国家資本主義体制なのである。基本は計画経済で、目標と道程を明確にした経済企画院作成の四次にわたる五カ年計画に基づいて、経済を次々にステップアップしていった。強力な軍事政権が、この経済計画を推進するテクノクラート官僚を百パーセント庇護した。だから社会のいかなる階層からも妨害が發生せず（民主主義抑圧で抵抗運動は発生）、計画は予定通り進行し、十億ドル輸出体制を百億ドル輸出体制にするのに、西ドイツは十一年、日本は十六年か

かったのに韓国はわずか七年というほど高効率の経済成長をなしとげた。

いってみれば、これは日本の軍部と革新官僚が結びついて作り上げた戦争中の国家総動員体制が、そのまま現代に延長されたような国家だったのである。

日本の戦後の急速な経済成長も、軍部抜ききの経済官僚たち（経企、通産、大蔵）が奮闘して作り上げたものだ。鳩山民主党政権は官僚を諸悪の根源視してひたすら官僚の力を削ぐことに狂奔しているが、それは何か根本的なところを考えたがいしているのではない。か。粗悪な政治家による政治主導国家と官僚主導国家のどちらが恐ろしいかよく考えねば。

×月×日



小沢一郎 虚飾の支配者

小沢問題について書く必要に迫られて、最近の小沢本と民主党本を山読んだので、その良し悪しを手取り早く仕分けしておく。

事件の大きな背景を知るには、産経新聞司法クラブ『検察 vs 小沢一郎「政治と金」の30年戦争』（新潮社 1400円＋税）がよい。

昨年三月の久大保秘書逮捕を機に書かれた本だから最新情報は入っていないが、大きな背景がわかる。もう一冊は、松田賢弥『小沢一郎 虚飾の支配者』（講談社 1500円＋税）。筆者は、主として「週刊現代」を舞台に、最も執念深く小沢金脈を追及してきた人。彼がどれほど丹念に細かな取材を積み重ねてきたかがよくわかる。今回の事件、相当部分（不動産疑惑のほとんど）が「週刊現代」の連続追及と、それに対する小沢の訴訟（「週刊現代」勝訴）などを通じて暴かれたもの。いま話題の小沢のウソの「確認書」問題も、小沢が「週刊現代」に反論する記者会見のためにデッ

チ上げたもの。

「週刊現代」と産経新聞はその後小沢追及の手をゆるめようとしなから、いい記事が読める。それと対照的なのが朝日新聞で、民主党政権成立後、政権ベタベタユルユルの紙面をずつと作ってきたから、この事件報道に関しても大幅に立ち遅れ、朝日新聞しか読まない人々は途中までほとんど訳がわからない紙面ばかり読まされてきた（私も当初そうだったから本当に困った）。朝日がそうなのは政治的立場が近いということもあるが、九〇年代に小沢と悶着を起し、小沢を全く取材できなくなつたために、小沢に詫言を入れて手打ちを行ったという事件の後遺症があるらしい。

最近出た朝日新聞政権取材センター編『民主党政権100日の真相』（朝日新聞出版 1300円＋税）は、政権ベタベタ時代の報道が中心で批判的視点が欠けるから、途中でバカバカしくなつて読むのをやめた。同じ朝日の本でも、五百旗頭の

真／伊藤元重／業師寺克行編『90年代の証言 小沢一郎 政権奪取論』（1500円＋税）は小沢の長時間インタビューだが、なかなか面白い部分（小沢のマインド、日米交渉など）と、小沢のとてもない考えちがいの部分（政治資金論、指揮権発動論など）とが混在して興味深い。

×月×日

ウンベルト・エーコ編著『醜の歴史』（東洋書林 8000円＋税）は図版なしには紹介できないが、きわめて興味深い本。書店で見かけたら、ぜひパラパラめくってみることをすすめ。醜の歴史を知ることには、美の歴史を知ることにはできないというエーコの意見に賛成する。美と醜を決める普遍的基準はない。社会によって時代によって文化によって基準は一変する。われわれがスペース・モンスターを見るか、スペース・モンスターがわれわれを見るかで戦慄すべきものの基準は逆転する。

『ほくの血となり肉となった五〇〇冊』そして血にも肉にもならなかった一〇〇冊』（小社刊）には、この連載の五十分も収録されています

『私の読書日記』は、立花隆、池澤夏樹、山崎努、酒井順子、鹿島茂の五氏が毎週交代で執筆いたします。